

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	異端者
Author(s)	田代, 四郎
Citation	龍南, 1926-15
Issue date	1924-12-24
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8765
Right	

異端者

田代 四郎

(一)

九月に入ると五年級の生徒は高等學校の入學試験準備に忙殺された。一週一度の晝寝の時間として喜んでゐた訥辯な校長の修身講話の時間にも、彼等様コツソリ机の下で英語の單語カードを擴げて見る様になつた。他人に返事を頼んで教室から逃げ出し、近の汚い駄菓子屋へ飛び込んで、ラムネや氷を飲んでゐた、温順な教師の擔當する博物の時間にも、彼等は、「代返」で逃げ出す事に變りはなかつたが、圖書室で靜かに數學の問題を考へる様になつた。『高等學校に入れば諸記物は皆筆記だから、君達も今から練習して置く必要がある。』妙に氣取つた若い文學士は、かう云つて西洋史を全部ノートにした。けれども忙しい生徒等にとつては、歴史の入學試験の範圍が希臘の獨立迄だつたので、それ以後の事件を諄々筆記させられるのは、憧れてゐる高等學校生活の一部を窺はせる筆記と云ふ單なる一事實によつて幾らかでも受験生活の焦燥と、飽き果てた中學生活の倦怠を忘れしめる事を喜ぶ少數の生徒を除けば、却つて不必要な苦しいものと思はれた。

田村は二番藤江は一番であつた。彼等の中學では席は成績順に後から前へ並んでゐた。従つて田村の後ろに藤江が居た。藤江より三つ年上の田村は、それでもコツコツ缺がさず歴史のノートを取つた。彼は年の若い藤江や、級中で秀才と云はれる松田等がそのズボラを誇つてゐるのを、あらゆる意味から心の中で嘲つた。

『成績の好い生徒がズボラを装ふのは「俺はズボラだが成績がよい。俺こそ天才だ」と云はぬばかりの態度ぢやないか。それを認められんがために己れがズボラであることを誇示したり吹聴したりするのだ。フン、拙い表現法だ。』

又彼は次の意味に取る時、苦々しくも腹立たしくも思つた。

『成績の悪い奴等が数の多いだけに、胸の痛手を同情し合ふが故にどうしても勢力がある。若しも成績の好い奴が、悪い奴等の機嫌を取るために、意識的にでも無意識的にでも、ズボラを誇示するとすれば、實に卑怯だ、卑劣だ。』

田村はよく彼の後ろの藤江が、歴史のノートの時間に、彼の姿に隠れて、新聞や雑誌を讀んでゐるのを聞いた。それも彼にだけ聞えよがしに音讀してゐるのだ。時々中は中學生仲間で、受験生必讀の参考書と奉られてゐるユース、オブ、ライフだのブツシングだのを誦誦する藤江の聲も聞いた。

田村の一學期の成績は頗る不良であつた。殊に歴史とその他二三の學科とは落第點であつた。然し、臨時試験最中に對8中學野球戰の應援團幹事の仕事や中學の文藝雜誌を一手に編輯しなければならなかつた彼は無理もない事だと諦めてゐた。彼はそれを回復せねばならなかつたし、その上三學期は入學試験準備に没頭するため、その學期の點數の埋合せも今からやつて置かねばならなかつた。

丁度十月の歴史の臨時試験のある二日前の事であつた。西洋史の講義が終つて、インキの溜つて居るペンを足下で無性に打ち振つてゐる田村の肩を後ろから軽く叩いた藤江は、

『今日一日歴史のノートを貸してくれんか』と聞き苦しい作り聲で云つた。

『俺はまだ一頁も見て居ないから……』田村の答は冷淡であつた。中學創立二十年紀念號を文藝部から出さねばならぬ田村は、『月末になると、忙しくつて、學友會雜誌等部數の少い奴をやつて居つた日には到底割に合ひませんからな』と恩に著せる酒好きを印刷屋を、田村の家から米を買つてゐる懇意な附近の居酒屋に引張り込み、ビール五本で參らせて、やつと二日間校正刷整の仕事を遣り續りして貰つて、愈々手の空いた今日と明日ミツチリ、歴史のノートを讀まうと思つて居た。此の二日が潰れると

彼は一週間許りは、飯食ふ暇も碌々ない程面倒臭い雑誌の校正に取り掛らねばならなかつた。

『君は一學期の成績が好いから、そう慌てる事もいるまい。』田村はかう附け足した。

『だつて俺達には全然ノートがないんだぜ。』何時の間に二人の側に近寄つた色の青白い病身の「秀才」松田が、ノートを借りるのは自分等の當然の要求でもあるかのやうに、又藤江と彼自身とを辯護する様に云つた。

田村は『ノートがないのは君達の怠慢故だらう。』と云はうとして急に口を噤み、松田には見向きもせず、藤江に向つて、

『誰か一學期成績のいい人から借つてくれんか。』とだけ云つた。松田は急に其所を去る譯にも行かず、隣りの机に腰を下してその席の男に、

『西洋史のノートつて實につまらんね。』とて、隠しを云つてゐるし、藤江は圓い顔を更に膨らかして、やけにノートを破つて、昨日の缺課届を書き初めた。

氣まづい沈黙が始業のベルの鳴る迄續いた。

(11)

解放された若い生徒等は潮の様に、古びて青苔の生えた石の本門から押し出された。田村もその中に混つて、尙も今日の藤江や松田との間に取り換された嫌な言葉を思ひ續けた。寸時を惜しむ五年級の生徒はカードを見て、六つかしい羅旬系の單語を低く發音しつゝ歩いた。明るい秋半の日光が、遠く廣がつた栗畑や、遙かの火山脈一帯に靜かに降り灑いで居た。畑の向ふに本門の前をE湖畔のS町の方へ續く乾き切つた往還の上には、黄色い砂塵が骨める様に小走つて行つた。ヒコボンドリアに罹つた人間のやうに、赤い變電所の煉瓦壁に反映した夕日の中に彼の細胞の一つ一つが吸ひ込まれて行く様に思はれた。

『秋だ！』彼は譯もなく云ひ知れぬ幸福感に充されて、出来るだけ胸を張り出して深く息を吸つた。大氣を鍛へた清冷の氣は、肺尖を刺す様な快さを彼に與へた。

『オ、利己主義者！』

突然彼の後ろから呼び掛けた者があつた。その輕卒な言葉と鼻にかゝつた作り聲とで、それが藤江である事を知つた彼は、藤江に對する嫌惡で一杯になつて後ろを振り返つた。藤江はニヤニヤ笑つてゐたが、田村の釣り上つた眉尻と青くなる迄上齒で噛み締められた下唇を見ると思はず立ち止つた。田村はツカツカと彼に近づいた。

『何が利己主義者だ！』さう云つた瞬間、彼の渾身の血が一齊に腦天に逆上するかと思ふと、殆ど無意識的に彼の大きな拳が藤江の頬を見舞つて居た。附近に居合せた生徒等は、殊に彼等のやり場のない狂暴性を満足させる火の出るやうな殴り合を豫期する生徒等は、忽ち二人を取り圍んだ。

『喧嘩は男性的だ。大いにやるべし！』

『勝つた方に加勢するぞ！』

『そのニヤケ男を打つ倒せ！』生徒等は騒ぎ立てた。一町許り先の變電所の下を通つて居た生徒等も、『三角形の二邊の和は他の一邊より大なり！』なんて叫び乍ら、栗畑を横ぎつて押しかけた。

『利己主義者だから利己主義者だと云ふんだ。』耳元迄眞赤になつた藤江は、持前の黄色い聲で呼んだ。

『貴様は不正な人間が、正しい人間を犠牲にする事實を認めるか。ズボラのために眞面目な人が苦しまねばならぬのか。』田村は小男の藤江の胸倉を掴んで、四年生の三學期に、散々怠けて、學校當局が今年から怠ける奴は假令學課の成績はよくとも容赦なく落第させる事にしたと云ふ風評を聞いて大煩悶をした松田に教室で手渡した手紙の文句をすっかり記憶してゐたので、自分にも不思議な程スラスラと喋り續けた。

『貴様は俺がノートを貸さないのが不服だらう。俺だつて貴様に止しい理由があるなら喜んで貸さう。だが貴様の怠慢のために惹起された缺損は貴様自身の勞力を以て償はねばならん。俺の行爲が貴様達の所謂犠牲心に適はないと云ふのだらう。』不意に彼等の傳統的な『犠牲心』に刃を向ける叛逆者を見出した生徒等は呆氣に取られて田村の顔を噴めた。

『誤られたる概念の犠牲心を放棄せよ!』田村は、その頃『自稱天才××發狂す』と新聞で狂人扱いにされた若い作家×××××の『○○』を読んでその若い主人公の意氣にすつかり惚れ込んでゐたので、全くその主人公氣取りになつて咆え立てゝゐた。生徒等は無論文藝部のために田村が如何に繁忙であるかは知らなかつた。彼も亦自分から泣言は云はなかつた。

彼等の概念的偶像を破壊された事の傷手と、單に田村が眞面目であり成績のよい事に對する嫉妬から生ずる一種の反感と、彼等が『滿腔の好意を以て歡迎し』てゐる此の頃ズボラを始めた藤江がやり込められた事のために、生徒等は早くも田村の味方ではなかつた。單なる若々しさから、事情も知らずに『そのニヤケ男を打つ倒せ!』と迄叫んで最初に手を下した『勇士!』——彼等の言を借りて云へば——田村を聲援した生徒等は今や同様の熱心さを以て『ニヤケ男』を應援せねばならぬ事になつてゐた。彼等の頭の上には、田村を威嚇する様に、バットや木片が振り廻された。彼等は動搖し初めた。田村はその鋭い眼光を殺氣立つた生徒等の顔の上にぶち撒いた。

『ズボラを甘やかす事は、ズボラを本當に救ふ所以ぢやないぞ!』

彼も亦不知不識の間に周圍の生徒等を自分の敵に取つてゐた。

『眞面目に勉強する事が恥づべき事なのか。眞面目なる者は常に不眞面目な者から嘲笑されねばならぬのか。何と云ふ不合理だ』『ズボラが單にズボラであるだけならばまだ許されやう。然し眞面目な人に迷惑と失望とを與へる時、ズボラの罪は淺くないのだ!』

田村は次第に熱して來た。聽て彼の頭がシーンと鳴つて、生徒等の洋服の黒や、學校の生垣の綠や、栗の穂の黃や、秋晴れの天空の紺碧や、そうした一切の周圍の事物の明確な色彩が失はれて、一色の灰色の中に溶け込んで行くやうに感ぜられた。それでも彼は尙續けた。

『貴様達のやる事は最負の引き倒しなんだ! 俺には貴様達がズボラを誇つて得意がつて居る理由が分らん!』

『馬鹿野郎! 中學五年級は人物を造るべき一年間だ。勉強すべき時期ではない。修養の時期だ!』生徒の一人が進み出て云つた

此の時初めて田村の意識は回復されて、一切のものが次第に元の色彩と光度とに歸つた。

『修養の時期？立派な修養が出来るだらう！』彼は落ち着いて來た。

『それが本校の傳統的のモットーなんだね。俺は無論修養には反對しないさ。けれどもビクビクしてサボル。それが習慣となつてサボル事に怖を感じなくなる。それを修養と云ふのだらう。かゝる良心の疵痺を修養と云ふのだつたら俺は飽迄反對なんだ。ネグリゼンス、イズ、クライム、(怠慢は罪惡なり)だぜ。』

先迄泣き出しさうな顔をして田村から胸倉を取られてゐた藤江は何時の間にか群集の中へ紛れ込んで、彼の代りにクラス中でも特に體格のよい、何事にもよく感激して狂ひ出す、此の中學の典型として奉られてゐる大將株の駒井がデリデリ田村に接近して來た。田村は駒井の面^{おもて}を大膽に見上げた。

『吾が光榮あるK中學……二十年の……光輝ある歴史……は……』聲が慄えて駒井は續ける事が出来なかつた。田村は覺悟しなければならなかつた。駒井が自分に議論で負ける事は明らかだ。そうしたら彼は自分を毆るだらう。彼の一撃によつて、生徒等は一齊に自分に襲ひかゝるに相違ない。かう思ふと彼は却つて心の安靜を得た。

『吾が光榮あるK中學の二十年の光輝ある歴史は、卑劣な「代返」と良心疵痺修養の歴史であつた、か。ハツハハ、ハ、ハ、』田村の相手を馬鹿にしたやうな高笑ひが、遂に駒井の頸^{くび}に玉を爆發させた。彼が豫想した通り、生徒等は彼に襲ひかゝつた。頭上に落ちる鐵拳と、頬を見舞ふ、平手打の間に、無中になつて相手^{かま}關はず毆り付けてゐた田村の眼の前に杉の下駄と陰險な藤江の顔が一瞬、ちつ、いたかと思ふと、左頬骨の邊りに烈しい痛みを覺えたまゝ、彼は横倒れに砂礫の上に打つ倒れた。

(III)

星は空にあつた。油のやうに滑かな湖面にどす黒い夕闇が這ひ寄つて、鷺鷥がその中を矢の様に突き抜けて行つた。對岸の簾からは乳色の煙がゆるやかに渦巻き登つて居た。遠くの往還をK市へ歸つて行く荷馬車の干^か乾^かびた車輪の音と、澄み切つた追分の

音調とが妙に悲しく田村の耳に響いて來た。山下からS町へ砂礫を運ぶ五枚板の荷船が、影の様に湖水の中に横たはる鳥の繁みに隠れて行く。土橋の上に立つと、うすら寒い川風が、彼の傷口へビリビリと染み込んだ。彼は急に、右手に持つてゐる濡れた風呂敷包みの冷たさを覺えた。

『俺に對してこそ憎しみはあれ、俺の學校道具に何の恨みがあるのか。俺を殴つた上、本やノート迄溝に蹴込まねばならぬ理由が何處にある。卑怯な女みたいな奴等ばかりだ。』

『いや、惡氣があつてしたのではなくて、たゞ昂奮の揚句蹴込んだのかも知れない。少くとも藤江以外の人間に對しては、そう解釋しなければならぬ。』

『どうせノートを目茶苦茶にされる程なら、初めから無條件に藤江に貸した方がよかつた様にも考へられる。』

『けれども俺の今日の行爲によつて、少しでも輕薄漢に打撃が與へられたならば、俺の受けた痛手は無駄ではなからう。俺と同じ考を持つてゐる二三の人は屹度俺に密かに感謝してゐるに違ひない。』

彼は若々しい、寧ろ子供らしい感激に浸り乍ら橋を渡り盡して、狭い畦路を小川に沿ふて歩いた。

『俺は餘りに自己の意地を通し過ぎはしなかつたか。餘りに強く出過ぎはしなかつたか。』

『さうだ俺は強く生きて來た。一學期K中學の危機を叫ばしめたXX事件の時も、俺としては人に恥ぢない行動を取つた。』

或る男は俺を單純な奴だと云つた。他の男は俺を官僚的だと評した。他の一人は、俺の釣り上つた眉と、頑固と几帳面な所とから、古武士の面影があると、善いとも惡いともどつちつかずの批評を下した。又一人は自己省察の足りない淺薄な奴だとも、猪突的な奴だとも云つた。

『だが俺は、自己の思索過程を長々と述べ立て、自己辯護と妥協の手段とする様な事はしなかつた積りだ。其處が他の一派から「強い」と云はれる所以かも知れない。』

『然し今や俺は多くの者から排斥されるであらう。「強い」と賞讃した多くの生徒等は、今日の俺の言葉のために俺を去るであらう。』

う。俺の周囲は敵ばかりだ。』

彼の頭の中には、再び今日の出来事が、遠い昔にでも起つた事のようにボンヤリと甦つて來た。制裁される者が悪いとのみ思ひ誤る教師の冷淡な態度が唯一つの鮮な印象であつた。

『どうした、どうした。また生徒等の亂暴だらう。さあ、早く起きて歸つた！』

之が顔中血だらけになつて倒れてゐる田村を見過し乍ら浴せかけた教師の言葉の凡てであつた。然もその時彼の口元に嗤ふやうな微笑が漂うてゐたのを田村は見脱す事は出来なかつた。

『大方俺をニヤケ男か不埒な事をした者とでも思つてゐるのだらう。當局も案外ルーズだ。風紀紊亂防止の唯一の手段は生徒間の腕力制裁にあるとして、之を公然の秘密として大目に見て居る當局が、大勢から叩かれた俺をそんな風に考へるのも無理はな
50』

彼の前には鉛色の水と黄色の平原とを劃して湖に沿ひ、河に沿ふて、更に海を連つて居るであらう黒い常磐木の木立が涯しなく續いた。野面の涯には白い霧が下りてゐた。そしてその上に浮んでゐる遠くの連山は、常になく淡く圓味を帯びて居た。

ふと彼の目の前に、圓い、眼尻の下つた、それでゐて狡猾さを現すやうに落ち込んだ眼を持つてゐる藤江の顔が白く浮び上つた。田村は怖しい憎惡を抱き乍ら、拳を振り上げた。拳は空に廻つた。彼はその勢でヨロヨロと二三歩前にのめつて、危く小川の岸に生えてゐる小さい節くれ立つた川柳の根を右足で踏ん張つて立ち止つた。其處には、涸れた、漸く鱈と目高位を生存せしめるに足るだけの水量を湛へた小川が幾筋も交叉してゐた。

藤江の幻影は又田村に不快な藤江の行動を聯想させた。

『日頃怠けて置き乍ら、試験が來れば人のノートで済ますなんて卑劣極まる。今日の代數の時間が終つた時、「オイ、間違はんな様に問題を寫しといてくれよ。試験の時借らなくちやならんからな、ハツハ、……」と俺に云つて、皆でボードに書かれた問題を寫してゐるのを尻目に掛けて、松田と共に出て行つたあの生意氣な態度はどうだ。それも松田の様に、病氣から生じた自棄

故なら、いくらか恕すべき點はある。藤江と來たら唯もう自分が惠まれた秀才だと思はれたためか、磊落を伴ひ示さんがか、乃至は成績の悪い奴等に追従せんがためにのみサボつてゐるんだ。聞いても聞かなくても結局同じやうな教科書本位の博物の試験の前日「毎時間講義を聞いて居り乍ら、博物の試験に落第點を取る奴は餘程頭が悪いんだなあ。俺は何時も人に「代返」を頼んでゐるんだから……。」と云つた藤江の言葉でも奴の心理状態は窺れる。

平常怠ける位ならアツサリ試験も無視してはどうだ。そして男らしく「在野黨」の仲間入りするか、或は元級に停滯したらどうだ。そうした生徒等は徹底した或る信念を抱いて進んで行くのだらうから、俺は何を云ふ權利もない。否徹底を求むる點に於て俺と一致して居るかも知れないのだ。」

彼は、矯正する事の出来ない他人の容貌や、服裝、性格等に付いて頗る敏感で、常に批評がましい事を云つてゐる輕卒な藤江の言動を思ひ出した。田村の親友で、今日缺席してゐなかつたら死力を盡して彼のために戦つてくれたであらう髯の多い河野が、髯を剃つて來る度毎に、藤江から『君の顔は煤けて見える。』と云はれた事も思ひ出された。不器用な人間を見ると藤江は所かまはず『モツプス』と呼んだ。『モツプス』とは彼等が英語の本で習つた獨逸の小話中の不器用な學生の名であつた。田村は、體が大きくて力の強い、それでゐて温順しい河野のためにも、何時か機會があつたら藤江を張り飛ばさうと考へてゐた。何處の中學にでもある如く、殊に殺伐な九州の中學では、殴り合ひは毎日のやうに行はれた。議論が爆發して喧嘩になると云ふよりも、寧ろ殴り合ひのために申譯的に二言三言云ひ合ふに過ぎなかつた。かうした環境に育つた田村は、人を殴る事は全体から認められたものなるが故に、或る程度迄之を是認してゐた。

何時か彼は、兄の家近くの森に踏み込んでゐた。腐つた落葉の香が鈍く彼の鼻を衝いた。慣れた彼は赤土の中に深く喰ひ入つた轍や石ころのために歩き憎い新道を取らずに、熊笹の中を家の裏口迄通じてゐる小路を取つた。地藏堂迄來ると、家の小窓からさして椎や杉の大きな幹を照して居る薄赤い光が、彼の目を射た。

『居るんだな。』

彼は呟いた。留守の時には何時もその小窓が閉つてゐたからである。彼は六疊の居間の長火鉢の側で、つくねんと坐つて、針仕事をしてゐる若い嬢を思つて見た。酒好きな彼が行く度毎にインインと酒の仕度をしてくれる優しい嬢を心に描いた。大抵十時頃になつて『ヤア来たね。相手しやうか。』と云つてK市の勤め先から歸つて、何時も快く好まぬ酒の相手をする二番目の兄を思つた。彼は大腿に二三歩進んだ。けれども彼の美しい想像を、目茶苦茶に破壊する冷たい自己反省が襲つて來た。

『何故に俺は自宅には歸らずに、兄の家へ來たのか。若く美しい嬢から心と體の痛手を醫して貰はんがために?』
彼は急に踏み止つて自らに問ふた。

『歸れ!そして年老いた父と、口やかましい母と嚴格な長兄の前で黙するのだ。自己辯護をしてはならん。お前は既に學校當局からも、河野一人を残した生徒等全部から見放された。更にお前は肉親から誤解される勇氣があるか。夜遅く傷ついて歸つたお前を、若しもお前が辯解しなければ、お前の両親は決して善くは思ふまい。世界にお前一人になつた時、尙お前がお前の信念を確保して進み得るかを試練されねばならん。然らずんばお前は藤江と同様な徹底せざる人間でしかないのだ!』
彼の若い心がかう叫んだ。

彼は靜に踵を返した。木の間から見えるK市の空は明るかつた。

『俺の自宅から二里半も遠ざかつてゐる!』

彼は俄に餓と疲れと傷口の疼痛とを感じた。彼は左の手で、まだ血の粘り着いてゐる頬を腕と抑へたまゝ、何時迄も濕つばい暗い森の中に佇んだ。(終)

一九二四—十

若しも人ありて『君もあまり酷い。俺の事を異端者中に書いてゐるな』と云ふなら私は靜にメンデイスの言葉を借りて答へるであらう。「否あの人物は誰でも吾々皆のことだよ。」と

——著者——